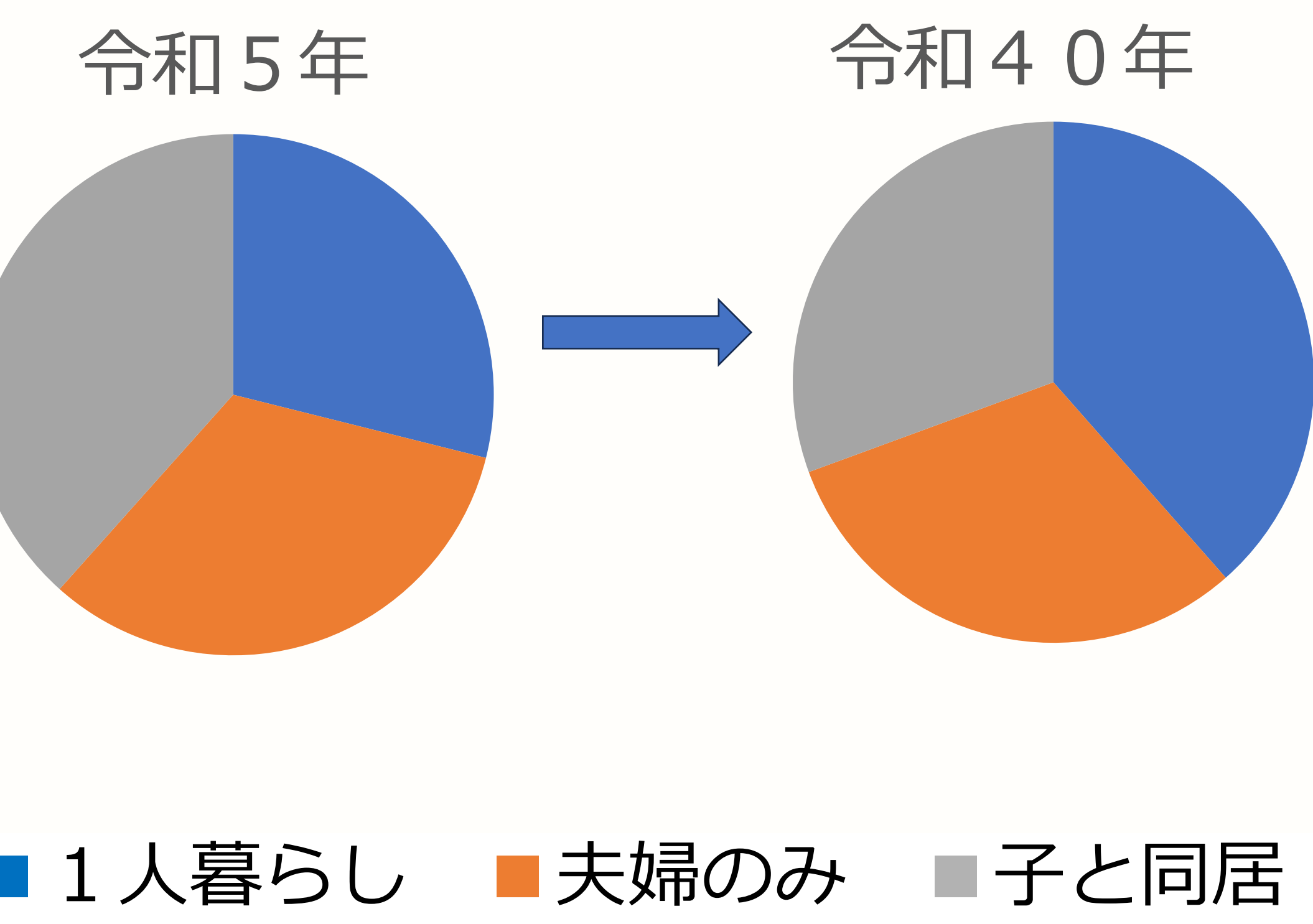


1. はじめに(社会的背景)

2025年に団塊世代が後期高齢者へ

- ・認知症や独居高齢者の増加、要介護認定率の増加
- ・医療と介護提供体制のひっ迫
- ・高齢者の世帯構成の変化



- ・令和40年は、高齢者世帯の7割が1人暮らし・夫婦のみの世帯になる

→地域住民の互助意識の向上、専門職との連携が必要不可欠

2. 事例紹介

- ・Aさん 77歳 女性
- ・統合失調症、認知症
- ・独居、マンションに1人暮らし
- ・元々は社交的だった
- ・ADLは自立、妄想による強い不安



5. まとめ

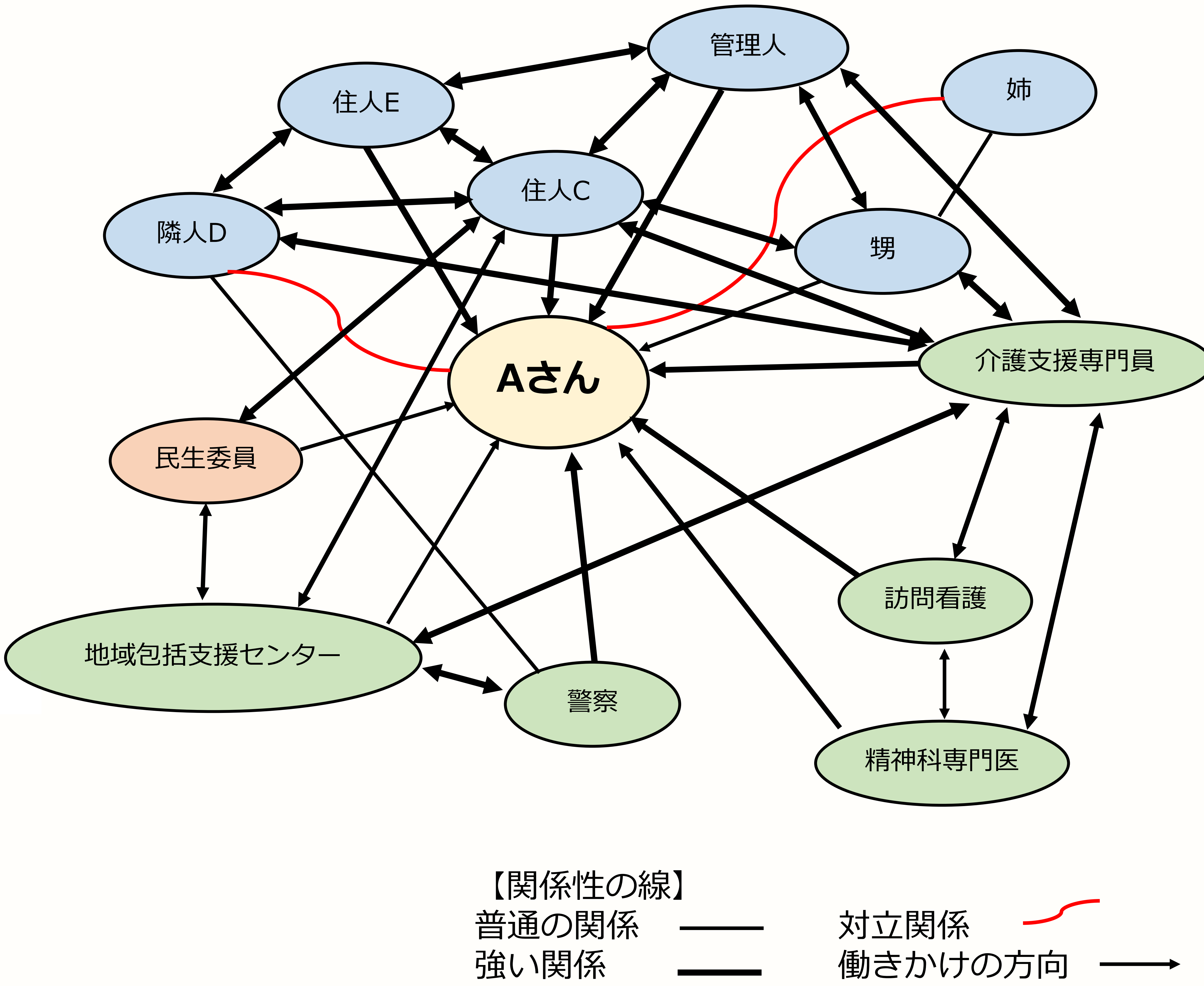
本事例からの結論

- ・【専門職のハブ機能】専門職が「ハブ」となり近隣の不安を解消
- ・【地域の互助を再構築】病態の丁寧な説明で「地域の互助」を構築できた
- ・【3つの見守りの連動】「緩やか・担当・専門的」な見守りの連動が、認知症、独居高齢者の在宅生活を支える

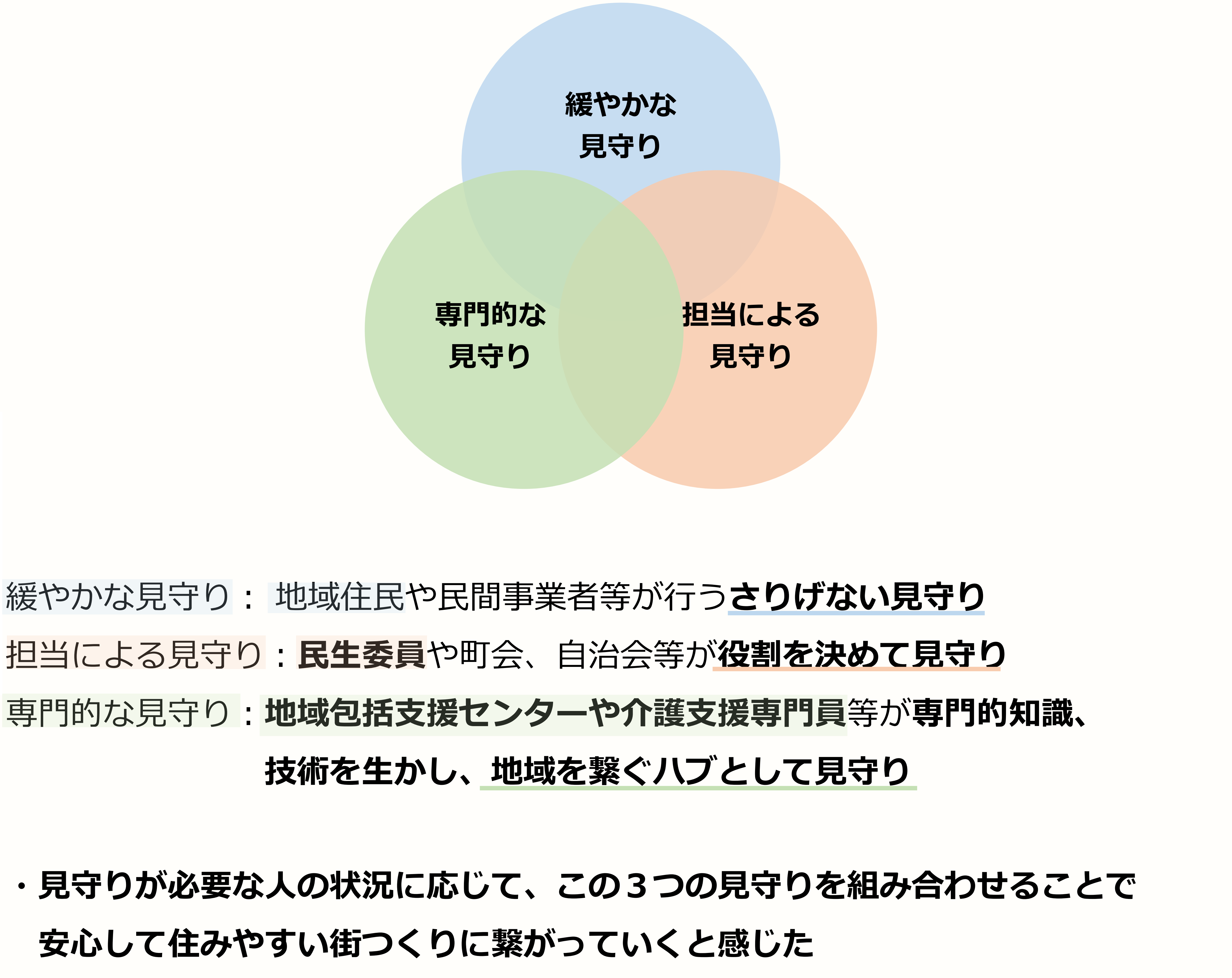
今後の展望

- ・【負担の分散】特定の個人に依存しない見守り体制
- ・【参加の敷居を引き下げる】「できること」から始める
- ・【境界をなくす】支える側・支えられる側の垣根を超える

3. エコマップ(地域資源とのつながり)



4.事例を通して気づき、感じたこと



【利益相反(COI)開示】
本発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業等はありません